

子どもを真ん中に保育を考える

—おもしろさを語りあうことから—

企画・司会 佐藤寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園） 指定討論者 川崎徳子（山口大学）

話題提供者 伊藤綾子・佐々木麻美・渡辺満美（お茶の水女子大学附属幼稚園）

1. 企画趣旨

「おもしろい」は「面白し」を語源とし、一説に、目の前が明るくなる感じを表すという。目の前が広々とひらける感じ、とある（岩波書店 広辞苑）。一人ひとり、その時々、ひとつとして同じではない子どもたちとの関わりは、わからないことだらけである。わからなさを抱えたまま目の前の子どもたちとの関わりを重ねていく保育の営みにおいて、時折、目の前がひらけたように感じることもある。わからなかったことがわかったというようなはつきりしたことではない。何がきっかけであったのかも無自覚であったりする。だが確かに、昨日までの関係とは変わったような、新たに出会えたような、そんな瞬間である。本シンポジウムでは、保育者が実践の中で感じた、それぞれに思う「おもしろさ」を語りあうことから、子どもたちの世界、子どもたちとの関わりについて考える。（佐藤寛子）

2. 話題提供 1 A児の残したハート

1学期から2学期中頃まで、特定の友達と遊ぶことの多かったA児。11月になり、いろいろな人と遊びたい気持ちが膨らんできたのかな、と思う姿が見られるようになった。

例えば、女兒5、6名と机を囲んでわたあめを作っていた時のこと。友達の「お店屋さん」というつぶやきを聞いたA児は、1人で廊下にお店台を運んだ。そして、自分と友達の作ったわたあめを集め、お店に並べた。しかし、作ったわたあめを自分で持ち帰りたいと思っていた人たちは、A児が自分のわたあめをお店に並べたことで困ったり、「取らないで」と怒ったりした。みんなと作ったわたあめで、みんなとお店をやりたいと準備したA児は、そんな友達の姿に「もういい!」と怒っていた。

別の時には「鬼ごっこをやろう」と自分から周りに声をかけ、楽しそうに友達と走り回っていた。しかし、まだまだいろいろな友達と遊ぶ経験の少ないA児。わたあめの時のように「みんなで」という自分の思いのみで動き、周りに伝わらず、分かってくれない友達に対して怒る姿が何度かあった。

そんなある日、登園してきたA児に、画用紙をたくさん欲しいと言われた。たくさんどうするんだろう……と思いつつA児に渡すと、A児は画用紙を半分に折り、そこに半分のハートを描いてと私に頼んできた。私が描いた半分のハートに沿ってA児が切り抜き、ハートがたくさんできていく。自分で切ったハートを、A児は周りの友達に渡し、もらった友達は綺麗に色を塗って持ち歩いていた。そんな周りの人たちを見て、私が「みんなAちゃんのハートに、綺麗に色塗って、大事に持ってるね」とA児に声をかけると、A児はとても嬉しそうに笑った。

降園後、保育室を片付けていると、A児がハートを切り抜いた画用紙が机にたくさん残っていた。それを見て、最

近のA児の、友達と遊びたいけれど、一方的でうまくいかない様子を思い出した。そして、今日友達にハートを渡していた姿を思い返し、このハートは、それでもみんなと遊びたい、友達が好きだというA児の思いそのものなのでは!?と、急に気が付いてしまった。実際、A児はそんなこと全く思っていなかったかもしれない。どんな気持ちでハートを作り、周りの友達に渡していたのか、本当のところはわからない。でも、私の中で最近のA児の姿や思いがつながった瞬間だった。そうすると、ハートに切り抜かれた画用紙が愛しくなり、とても捨てられず、何枚か糸で繋げて保育室に飾った。

毎日保育で子どもと関わっている時は必死で、「おもしろいなあ」と感じることは正直少ないかもしれない。でも、保育後に子どもたちの残していったものや、先生たちと語り合う子どもの姿などから、あの時のあの子が見えない思いや、子どもたちの世界に触れられたように感じる時、保育って、子どもって、おもしろいなあと思う。（伊藤綾子）

3. 話題提供 2 保健室で、B児との関わりから

裸でおどけた顔をして、保健室に顔をだすB児。最近のB児は着替えた時、裸になったタイミングでそのまま逃げ回っている。

この日は上着の袖に足を入れ、ズボンにし、上半身裸になって逃げ回っていた。しばらくして洋服を着たB児が、担任に抱えられながら保健室に来る。B児は担任の手の中から抜け出そうとしていた。お弁当の準備もあり、B児を保健室で預かることにした。B児を抱きあげると、疲れたのか落ち着いてきた。保健室にけがした子どもが来たことから、B児と離れ手当てに向かった。するとB児が「Bちゃんがする!」と、手当てをする私の膝の上に乗る、私の代わりに手当てをすると言う。ちょっとした膝のすり傷なので、B児に任せてもいいかと思った。しかし、けがをした子の顔が曇り、ちょっと不安そうな様子を見せたので、B児に私の手を重ね、手当てを一緒にすることにした。B児の手は焦っていて、消毒をするにもパタパタと動いている。少しゆっくりしたいと思い「優しくしないとね」と言葉をそえた。すると、止められると思ったのか、B児が余計に力を入れるのが伝わってくる。このまま、力が入ったままなのかと心配になったが、傷に触れるB児の手から力が抜けるのを感じた。私はけがをした子に「痛かったよね」などと声をかけ、B児と一緒に手を動かした。膝に乗せたまま、「お弁当だね」とB児に声をかけると、「行かない」という。「おなかのすくね、食べてまた遊ぼうよ」と声をかけると、「一緒に来て、そばにいて」と言ってきた。一緒に保育室まで行き、B児のそばにいた。B児は最初こそ離れなかったが、食べ始めると周りの子どもと過ごしていった。B児はその後もお弁当になると、自分の近くにいて欲しい

と呼びに来るようになった。

B児は周りの友達に追いかけれられ、笑われることを楽しんでいる様子だが、裸になることも楽しんでいるのだろうか。裸になって笑ってもらうことが、自分を表現していることなのかわからずにいた。B児と一緒に手当てをすると、力の抜けていく感覚があった。ずっと力が入ったままではなく、私に預けられるB児のからだを感じ、大丈夫と思えた。裸になる意味はわからないけれど、B児の中で何かを変えたい、変わりたい表現なのかもしれないと思えた。そして、抱きかかえられることに抵抗したのに、一転、今度は一緒にいて欲しいという。離れることが怖いと思うのだろうか。裸になることが、周りに受け入れられるものでないことをB児はわかっているように思う。わかっているけれど、B児が今できる表現はこれしかないのかもしれない。

わからないことばかりだが、一緒に手当てをすることで、B児のどうにもならない気持ちを分かちあえた気がした。子どもたちの自分でもわからない気持ちをほんの少し引き受けて、保健室から送り出せることは、私の次につながる力となり、子どもたちともっと関わりたい、保育をおもしろいと感じさせてくれる。(渡辺満美)

4. 話題提供3 ねずみばあさんを捕まえよう!

クラスで楽しんでいた海の生き物作りを、継続して製作できるアトリエ室に移すことにした。場を変えたことでいろいろな子どもたちが関わり始め、海の生き物作りから水族館へと変化し、お客さんと呼んでショーを開催していった。イメージが広がり、どんどん場づくりや魚の製作を進めていく子どもがいたり、何となく様子が気になって見に来る子どもがいたりした。そんな中、C児は四つん這いで水族館へ駆け込んできて、機敏に走り回る。すると、みんなが喜んで追いかけて捕まえるということを繰り返していた。水族館と全く関係ない動きをするC児に「何になっているの?」と聞くと「ジャッカル!」と嬉しそうに言う。「なぜ水族館にジャッカル?」と訳がわからない私は、「魚かなにか作らない?」と誘うが、あっさりと「作らない!」と言われてしまう。みんなのことが気になって来ているのだろうが、本当にやりたくないのか、やりたくてもできないのかわからないC児が気になったまま、どうすることもできない日々は続いた。

そんなある日、降園前に、片付けをして女兒と保育室へ戻ると、カーテンが閉まり電気が消え、暗くなっていた。水族館の続きで、暗くしたのだろうか…と考えていると、女兒は「地下のお話だね!」と嬉しそうな顔をして言う。そういえば、昨年の担任が幼稚園の地下を題材にした素話をしていたことを思い出した。子どもたちの心に嬉しいものとして残っていることがわかり、子どもたちに聞いてみることにした。「林の組のときに地下のお話を聞いていたんだって? どんなお話だったの?」すると、「地下にねずみばあさんが住んでるんだ」「押し入れにね」「いろいろなものをもって行っちゃうんだ」と口々に話す。私は「実は…幼稚園には押し入れが一つだけあるの」と話し始めた。園庭にある離れには押し入れがある。子どもたちはそれぞれに「あそこかな?」と思い浮かべながら聞いていた。その日靴下が片方見つからずにいた友達に、「きつと、ね

ずみばあさんがとっていったんだ。」と言い、子どもたちの中で、日常の出来事をねずみばあさんにつなげて考え始める様子が見られた。翌日登園すると、子どもたちは、押し入れがある離れの窓から中を覗き、いないと思うと園庭を探し始めた。いつも遊ぶことの多い友達同士でなく、いろいろな子どもたちが参加していることに驚いた。C児もその一人だった。友達が「(園庭で) ネコを見た、化けているのかもしれない」と言うのと「僕も見た!」と見た場所をみんなに話した。集まりの時間に読み始めた『おいしいのぼうけん』を、翌日「図書館で借りて全部読んだんだ」と言う。みんなで読みたかったなという思いもあったが、C児が自分でそうしようと思ってしたことがとても嬉しかった。その後、ねずみばあさんの影が見えたとみんなで探っていると、C児も「(手下の) ねずみが3匹いた!」と、興奮して教えてくれ、私も周りの子どもたちもあまりの多さに大興奮。見えているはずはないが、見えてくる世界。子どものうちでしか体験できない、物語の世界。今までC児は、自信がない面があり、すぐはぐらかしたり、茶化したりするので、私は、もっといろいろなことに向き合えるように支えていきたいと思っていた。しかし、見えないものが見えてくるこの世界の中では、それをも一緒に抱えながら、こうかもしれない、ああかもしれないとイメージを自在に広げ、自由に表現することができるのではないのか。それが周りにつながっていくことで、自信のようなものになっていくといいなと願わずにはいられない。

物語の世界と現実とがつながっていき、さらにそのことが子どもたちをつなげ、イメージがどこまでも広がっていくおもしろさに、子どもたちも私もワクワクが止まらない。子どもたちと過ごして、子どもの思いがわからず、自分がどうしたらいいのかもわからないことはたくさんある。でも、子どもたちとワクワクできるようなおもしろいことの中には、きっと何かが変わっていく大事な力があると感じている。(佐々木麻美)

5. 指定討論 「おもしろい」と語られることには…

保育者にとって、保育の場で子どもと向き合う日々は、一人ひとりの子どもに向き合うことを思いつつ、集団生活の流れも意識しながら様々な事柄を同時に進め、それも含めて目の前の子どもたちの育ちあう場を支えていくことに力を注いでいくことが続いていく。その過程は、多くの工夫と苦悩の連続だと思われるものが感じられるものの、保育を振り返って語り合う保育者からは、「今日ね…」、「…おもしろい」と表現される子どもの姿がある。そして、そこからまた、次の日の子どもと保育者の生活が創られていく。一方では、「おもしろい」とは保育を語れず、追われる日々にある保育者の現実に触れることも私が出会う研修等の場面から思い起こされてくる。

「おもしろい」と感じることで、そこには、その人自身の対象への能動性がある。つまり、保育者であるその人が感じ考える大事な何かが含まれているということだと。

ここでは、それぞれの保育者が感じている「おもしろい」を紐解きながら、保育者にとって、あるいは保育実践にある「おもしろい」を手掛かりに、子どもの世界と保育の「今」、そして、「これから」へと迫っていきたい。(川崎徳子)